

子どもに伝える方法(おうちの方へ)

能登島小学校

子どもの騒ぎをしずめたいとき、大きな声で「静かにしなさい！」と言ってしまうことがあります。余裕のないときは、なおさらです。

国語教師・大村はま（故人）は自著のなかで、「生徒に話をやめるように伝えるとき、“静かにしなさい”という言い方は、教師のやりかたではありません。そんな言い方ならば、教師でなくてもできるからです」と述べています。注意することは本当にむずかしいものです。

次の記事は教師のみならず参考になります。



（以下、朝日新聞 2020.3.22 付より引用）

肯定の言葉 子どもを動かす

言うことを聞かない子どもにイライラ。そんな時の声かけのコツを、学童支援員歴35年の東京成徳大学非常勤講師、下浦忠治さんにうかがいました。



子どもに注意するときに「〇〇しなさい！」「なんでできないの！」など強い禁止の言葉を使いがちですが、それは口うるさいだけです。否定的な表現や言葉ではなく、肯定的な表現や言い方を考えましょう。部屋の中を子どもが走っていたら、「走るなー！」ではなく「室内では歩こうね」。与える印象が大きく違います。

もうひとつ心がけたいのは、子どもに対して共感の言葉をかけることです。遊んでいる子どもに他のことをやらせたいとき。「遊びは終了！」ではなく、「楽しそうだね。盛り上がっているところだと思うけど……」など、まず子どもの気持ちを尊重します。

大事な話をするときも、「今からこういう話をするけれど、その前に何か言いたいことがある？」と、子どもの思いをまずは聴き取ってあげることです。「静かにして。こちらの話を聞いて！」と急に言われても、子どもの気持ちはこちらを向いてくれません。大人に話を聞いてもらうと、子どもは大人に認められているという気持ちを抱きます。それは自己肯定感や自己有用感を育むことになります。

大人に一方的に言い渡されたことには一時的に従っても、その行動は長く続きません。子どもに相談し、子どもが自己決定する過程を繰り返すことが、子どもの成長に役立つのです。

（以上）